

取組実績の概要（2 ページ以内）

本学では、文部科学省・大学教育再生加速プログラム（AP）のテーマⅡ（学修成果の可視化）の取り組みとして、これまでの教育・研究活動等の改善を図り、教育課程を体系化し、学生自らが自身の学習目標の設定・達成度評価を行うシステムを構築しつつ、良き職業人の育成を見据えた教育体制を整備することを目指した。具体的には次の目的（①～⑤）を掲げて事業を展開した。

- ① 高大接続改革の推進、② 自主的学習活動の推進、③ 学びの過程における達成度評価システムの確立、④ キャリア教育の徹底による良き職業人の育成、⑤ 高大接続改革における質保証の推進

図 1 に学修の過程と事業目的との関係を示す。入学してから卒業までの教育課程は授業によって編成される。一方、学生は正課授業以外に課外活動や委員会活動等で教員の助言を受ける正課外教育を経験する。また、教室の内外での教育活動に触発され、自ら学修活動と取り組んでいる。これを踏まえて、本学では、「学修成果」を「正課教育成果」、「正課外教育成果」および「自主学習成果」の3つに定義し、正課による「授業の学修成果」、正課・正課外・自主学習を包括した「教育課程の学修成果」の視点で可視化している。以下に取組実績の概要を示す。

① 高大接続改革の推進

初等教育・中等教育で積み重ねた「生きる力」に関わる入学時達成度を自己評価するアンケート調査を実施した。アンケート調査は「生きる力」を大局的に捉え、知識・技能・態度が身に付いたかと問い掛けた。いずれの項目でも大学教育において伸びしろのあることを自覚している学生が多数いることが確認できた。これは入学時学習成果データベース（DB）の主要データと位置付けられる。

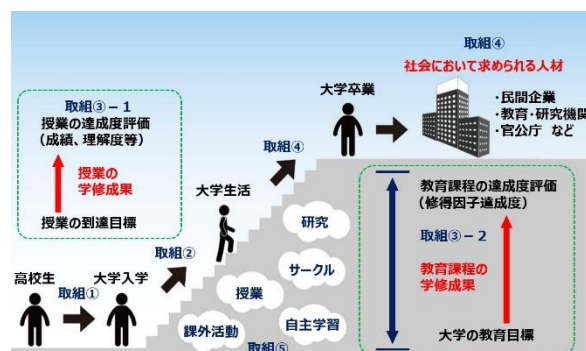


図 1 学修の過程と事業目的との関係

② 自主的学習活動の推進

学生個人が自ら目標を設定し、学修の過程を振り返り、その記録をオンラインで入力・集積するための機能を有するラーニング・ポートフォリオ I（LP I）を導入した。さらに、LP I では学生個人と教員が対話できるツールも提供している。

また、アクティブ・ラーニングあるいは e-ラーニングを積極的に実践している科目の学修成果（「主体性」の向上感）をアンケート形式で可視化した。その結果、これらの要素を含む科目群は、「主体性」が触発されたと自己評価している学生が多く、授業外学修時間の向上にも寄与していることが分かった。

③ 学びの過程における達成度評価システムの確立

本学では、教師の授業力、学生の学修力を向上させるために、「授業の学修成果の可視化」として学期末に授業評価アンケート（20 個）を継続実施している。これら 20 個の変数を授業評価変数と呼んでいる。評価を開始した平成 12 年度から授業の理解度や熱意度等の変数が増加傾向にあるが、特に本事業期間においては宿題頻度および宿題取組度の授業外学修に関する変数が大きく増大した。また、本学では LP I と対をなす教員の教育活動を可視化するためのティーチング・ポートフォリオ（TP）を作成・運用している。この LP I と TP によって、学生の学修および教員の教育の双方の改善活動において連携した二重の PDCA サイクルを実装した。なお、TP は常勤教員の 97%（令和元年度）が開設するに至った。

生きる力	八戸工業大学の教育目標	修得因子	学力	社会人基礎力	JABEE共通基準
<ul style="list-style-type: none"> <li>豊かな人間性</li> <li>思いやり/のび/感動する心</li> <li>主体性</li> <li>健康・体力</li> <li>確かな学力</li> <li>表現力</li> <li>判断力</li> <li>協働性</li> <li>知識</li> <li>技能</li> <li>思考力</li> <li>多様性</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>豊かな人間性と総合的判断力</li> <li>専門分野の基礎原理の理解と高度応用展開力</li> <li>社会の変化に対応できる柔軟な思考力</li> <li>地域社会への関心をもちグローバルな視野で物事を考える姿勢</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 真実な心</li> <li>② 感動する心</li> <li>③ 主体性</li> <li>④ 人間関係理解力</li> <li>⑤ 自己管理能力・ストレスコントロール力</li> <li>⑥ 倫理観・規律性</li> <li>⑦ 日本語コミュニケーションスキル</li> <li>⑧ 外国語コミュニケーションスキル</li> <li>⑨ チームワーク力</li> <li>⑩ リーダーシップ力</li> <li>⑪ 総合的学習経験・創造的思考力・創造力</li> <li>⑫ 数量的スキル</li> <li>⑬ 情報リテラシー力</li> <li>⑭ 論理的思考力</li> <li>⑮ 問題解決力</li> <li>⑯ 専門基礎原理の理解力</li> <li>⑰ 専門基礎原理の高度応用展開力</li> <li>⑱ 継続的学習力</li> <li>⑲ 市民としての社会的責任感</li> <li>⑳ 異文化理解力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>人間関係理解力</li> <li>自己管理能力</li> <li>倫理観</li> <li>コミュニケーションスキル</li> <li>チームワーク・リーダーシップ</li> <li>総合的学習経験・創造的思考力</li> <li>数量的スキル</li> <li>情報リテラシー</li> <li>論理的思考力</li> <li>問題解決力</li> <li>生涯学習力</li> <li>市民としての社会的責任感</li> <li>異文化理解力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>主体性</li> <li>ストレスコントロール力</li> <li>規律性</li> <li>傾聴力</li> <li>発信力</li> <li>柔軟性</li> <li>働きかけ力</li> <li>創造力</li> <li>情報把握力</li> <li>課題発見力</li> <li>計画力</li> <li>実行力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>a. 地球的視点から多面的に物事を考える能力とその養育</li> <li>b. 技術が社会や自然に及ぼす影響や効果、および技術者が社会に対して負っている責任に関する理解（技術者倫理）</li> <li>c. 日本語による論理的な記述力、口頭発表力、討議等のコミュニケーション能力および国際的に通用するコミュニケーション基礎能力</li> <li>d. チームで仕事をするための能力</li> <li>e. 種々の科学、技術および情報を利用して社会の要求を解決するためのデザイン能力</li> <li>f. 数学、自然科学および情報処理に関する知識とそれらに応用できる能力</li> <li>g. 与えられた制約の下で計画的に仕事を進め、まとめる能力</li> <li>h. 該当する分野の専門技術に関する知識とそれらを問題解決に応用できる能力</li> <li>i. 自主的、継続的に学習できる能力</li> </ul>

図 2 大学教育目標属性としての修得因子の抽出

（テーマ：Ⅱ、大学等名：八戸工業大学）

平成 27 年度 AP 事業において、大学の教育目標（ディプロマ・ポリシー）の属性を修得因子と呼び、文部科学省の「学士力」（2008）、「生きる力」（2007）、経済産業省の「社会人基礎力」（2006）、JABEE 認定基準（2012）との相関図（図 2）より 20 個の修得因子を抽出した。また、これら 20 個の修得因子を基に学科の教育目標や授業科目との関連付けを示したカリキュラム・マップ・ツリーを構築した。

平成 27 年度から令和元年度の前期・後期学期末において、継続事業として 20 個の修得因子の主観的達成度の評価アンケートを行い、集計結果をルーブリック評価し、「教育課程の学修成果の可視化」に関わる測定を実施した。また、教員の成績による成績基準達成度、卒業生採用企業人事担当者による客観的達成度も測定した。さらに、主観的達成度平均値と成績基準達成度平均値との相関関係を基に、その強相関修得因子と主観的達成度平均値間の相関関係を用いて計算することにより、よりエビデンス性を付与した客観的評価尺度で達成度を評価する手法を開発した。

④ キャリア教育の徹底による良き職業人の育成  
 本学では、AP「高大接続改革推進事業」の中で、LP I を効率的・効果的に運用するため授業科目「キャリアデザイン I・II・III」のシラバスを明確化した。授業では学修の過程を振り返るための時間を授業時間内に設定し、LP I への書き込み、授業評価アンケート・達成度評価アンケートへの回答記入を促進した。この結果、90%程度以上の学生が LP I への書き込み、授業評価アンケート・達成度評価アンケートへの回答記入を行う状況が実現し、学生の学修改善取組が全学的取組として実施された。上記の振り返り等によりキャリア形成の支援を行った。

⑤ 高大接続改革における質保証の推進

平成 30 年度の卒業生から 4 年後期までの総括的評価を実施し、卒業時に本学が質保証できる修得因子達成度のレベルを全学的に定め、教育改革専門委員会において個々の学生が当該レベル以上の達成度を獲得したことを確認した上で、ディプロマ・サプリメント（図 3）を交付した。ディプロマ・サプリメントは、個々の学生の達成度・達成度学年平均値（いずれも成績から評価した達成度）、主観的達成度（自己評価した達成度）、卒業生達成度（企業が評価した卒業生の達成度）、社会接続重視度（企業が採用時に考慮している新卒者の重視度）を掲載した。

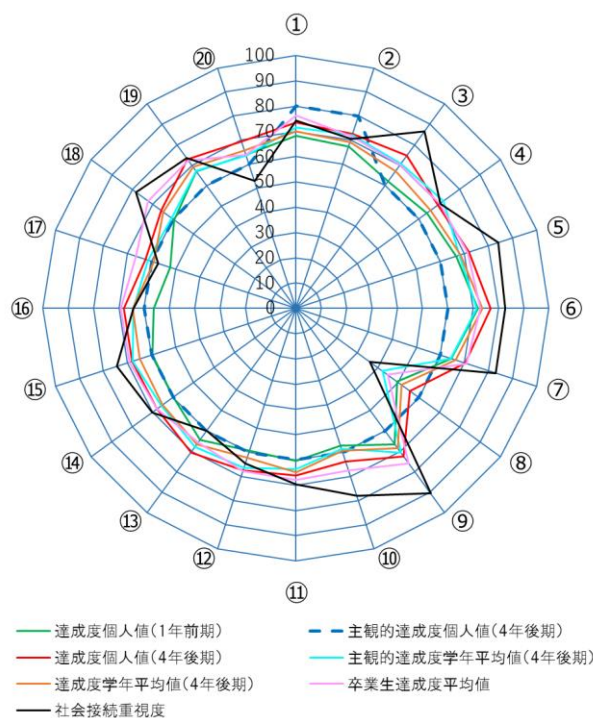


図 3 ディプロマ・サプリメントの一例

【必須指標の達成度】

	平成 26 年度 (起点)	令和元年度	
		目標	実績
退学率 [% (退学者 (除籍者を含む) / 在籍者数)]	4.3%	1.0%	3.5%
プレースメントテストの実施率 [% (テスト実施者 / 入学者数)]	98.6%	100%	99.3%
授業満足度アンケートを実施している学生の割合 [% (実施学生数 / 在学者数)]	77.5%	95.0%	95.7%
上記アンケートにおける授業満足率 [%]	68.8%	85.0%	77.1%
学修行動調査の実施率 [% (実施学生数 / 在籍者数)]	80.7%	100%	90.0%
学修到達度調査の実施率 [% (実施学生数 / 在籍者数)]	11.3%	90.0%	93.9%
学生の授業外学修時間 [時間数 (1 週間当たり (時間))]	9.4 時間	21 時間	34.3 時間
学生の主な就職先への調査 [実施の有無]	有	有	有